

安東次男著作集

第六卷

安東次男著作集

第六卷

青土社

安東次男著作集 第六卷

© 1976 Seidosha

昭和五十一年六月一日印刷

昭和五十一年六月二〇日 限定一〇〇〇部発行 0390-900017-3978

定 価 四九〇〇円

著 者 安東次男

発行者 清水康雄

校訂者 神崎 忠

題 字 加藤楸邨

発行所 青土社 東京都千代田区神田神保町一―二九 市瀬ビル (電)二九二―七〇七六

振替東京 9-192955

印刷所 大盛印刷

製本所 美成社

第六卷 目次

# 花づとめ

- ひぐらし9 くずの花12 仲秋の佳句15 秋まつりの魚18 君まつと21 黄落  
 24 うめもどき27 亥の子30 読人しらず33 良寛の歌36 もずの草茎39 現  
 れ出るもの42 冬に入る44 柴漬47 蛇笏の正月50 去年今年53 植物の名56  
 明治の雪59 寒62 病者の句65 続・病者の句68 紅梅71 野を焼く74 アワ  
 ニキ77 春の岬80 はるとりの83 ふたたび、はるとりの86 さわらびの89  
 醉茎の味92 奈良坂の石仏95 山ざくらの句歌98 埋み火101 ある歌104 いよ  
 いよ白く107 出合い110 未見の故郷113 あい風116 紅の花119 どむみりと122  
 あじさい125 花かつみ128 鶯の尻刺131 夏虫縁起134 無常迅速137 はなみずき  
 140 夏の花143 連句146 茂吉と白秋149 人こそ見えね152 印象155 読人しらず  
 再説158 ある秋の句161 子規と「ホトトギス」164 もみぢ踏み分け168 小説家  
 の月171 かしの実174 蟋蟀堂にあり177 酒歌の格180 ふるさとの歌183 玉葉の  
 雨186 神の旅189 眞贋193 歌の流伝196 むらさきしきぶ200 はつしぐれ203 素  
 十の句207 あわれのある句211 年忘れ歌仙215 一月沼219 凌波仙子222 正徹の  
 和歌226 孤雁229 獺のまつり233 春望236 花づとめ239 たいら雪242 藻伏東鱒  
 246 惟然の句249 かたかごの花253 春まけて256 春愁259 春水開眼262 薺の花  
 266 はなしづめ269 子規の写生272 夏の初音275 時すぎにけり278 雨蛙281 げ  
 のはじめ284 父と娘288 夏の風292 朴散華295 菜殼火299 麻刈303 流れ苗307  
 一茶の朝顔311 七夕幻想315 夏山の鳥319 黄鷄323 夏を送る327 宇治十帖余聞

## 拾遺亦楽

- |          |     |
|----------|-----|
| 拾遺亦楽     | 377 |
| 漆箔像の魅力   | 403 |
| 蔵沢の画     | 427 |
| 呉須赤絵の皿   | 445 |
| 染付の雑器    | 463 |
| 半日の閑     | 479 |
| 古伊賀ということ | 501 |
| 備前       | 521 |
| 杜鵑考      | 539 |
| 七宝と勾玉    | 557 |
| 詩画集のこと   | 575 |
| 白磁小品     | 593 |
| 壺しぐれ     | 333 |
| 二つの顔     | 417 |
| 塗物       | 437 |
| 夏の壺      | 455 |
| 鈍翁一覽     | 471 |
| 夕千鳥      | 491 |
| 物狂い      | 511 |
| 五清箔絵文台   | 549 |
| 伊万里の意匠   | 531 |
| 洗硯       | 565 |
| 茶碗好き     | 585 |
| 一期一会     | 603 |



安東次男著作集 VI



花  
づ  
と  
め



## ひぐらし

ここ二年続けて、夏のヒグラシをきいた。しばらく雑事にとり紛れて、このごろは都塵の中ではアブラゼミの声さえ聞くこともまれになっていたから、まことにもの珍しいものをきく気がした。杜甫の言う「五月ホウフツ寒蟬かんせみヲキク」、という念いで聞いていた。陰曆としても五月はちと早すぎるから、杜甫の言うのは、その詩にうたうところのクスの木の葉ずれであつたらうか。しかし、六月かすかにヒグラシの鳴きぞめを聞くということは、ありえないことでもなからう。なにしろ、千二百年まえの唐代中国のことである。それとも杜甫の幻聴であつたか。

ヒグラシは、いまでも、七月から十一月ごろまでは聞かれる。寒蟬の名があるゆえんだ。

秋の虫のことを書こうとおもって、話が季節をそれたが、去年は裏磐梯できいた。山を背負った温泉宿の一室で、ずいぶん久しぶりに句を作った。というよりも、自然に句になったのである。

### 蛸といふ名の裏山をいつも持つ

山陰寄りの小盆地で育った少年も、今では郷土のたたずまいを定かに覚えていないが、この句のような環境で私は育った。そのことに若干の感慨なしとしない。わが生の際かなものも、不分明なものも、ともに裏山にある。

残暑の東京に帰ってから加藤楸邨さんに電話で句を伝えたところ、さっそく唱和してくれた。

ひぐらしを聴かである日は阿修羅かな

楸邨

どちらも（と言ってはわるいが）格別なこともない句だろう。しかし、二句一章としてながめれば、現れてくるものは、また別である。この師は、ときにわが悪声をヒグラシと聞く、と言ってくれているようでもある。いい年をして聞分けのないことをするな、心をいとえ、と言っているのかもしれない。いつの間にか三十年のつきあいの月日が流れ、それが一瞬の間によみがえるということとは、ありがたいことだ。

ヒグラシの歌は夏に詠み秋に詠むが、

ひぐらしの鳴きつるなべに日はくれぬと思ふは山のかげにぞありける

という「古今集」秋の部にのせる読人しらずがなかなか佳い。

## くずの花

折口信夫つまり歌人釈道空に、代表作とされ、本人もそれを肯ったうたがある。

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり

大正十三年、三十八歳のとき、作者は老岐へ旅行し、その風物に「神代の一国」を見た。歌はそのときの矚目のものではあったけれど、道空の古代憧憬が、熱っぽい息づかいでよく現れているだろう。国く栖す地方にその名をとどめるクズは、とりわけ大和のものである。

古俳書にも「すべて葛を秋に用ゆるは葉のうへなり」と言うように、「古今集」以

来クズの裏葉の白々とした印象をうたった歌は多いが、その花を詠んだ作品はほとんどない。

歌を艶えんに作りなすということは、優艶なものを題材として詠むということではなかった。そこに日本の詩歌観の一つがある。うたは矚目のものではあつたけれど、釈迦空の無念のおもいが、重くひそやかな吐息となつて洩れてくる、そう思わせる詠みぶりである。

クズの花を知らぬ人にクズの花を知らしめんための歌ではないから、「葛の花」といえば、「色あたらし」は余分である。現代の句ならもちろん、歌も概ねそういうふうにする。そこをわざわざ作者は、「色あたらし」と言っている。見どころはそこだろう。

つまり作者は、木にあるときは裏白葉のかげにむしろ色褪せて見えるこの花も、散つて踏みしだかれて、いまや鮮かに見える、と言っているのだ。おなじ紫紅色の花でも、ハギのようなこまごまと零れる花では、「踏みしだく」こともできない。

クズの花はかくべつつよい印象ではないが、クズそのものは強靱でよく繁る。「踏

みしだかれて」に、その面影をたどらせるところがあるのもよい。

岩肌がちの上に、紫というよりは紅にちかい色を生々しく滲ませている印象を、よくつかんだ歌である。折口は、「踏みしだかれてゐたことを原因として、山道を行つた人を推理してゐる訳ではない」と自註で言っている。